

旧社員寮(築60年)を活用し、まちの仲間たちとまちの寮をつくる「ぶんじ寮プロジェクト」は2020年8月に始動した。21室を住まいとして活用。広い敷地(222坪)には、キッチン・食堂・中庭・屋上・畑・ゲストルーム等、豊かな共用部を備える。この共用部は、まちとの接点・縁側になる。暮らしのコンセプトは「おとなも子どもも！持ち寄ってつくる、安心と冒険が同居する一人ひとりの居場所づくり」だ。そのため、住民・関わる人それぞれが「もちより」を行う。それは、余っていることだけでなく、困っていることも持ち寄られてきた。私たちのまちにあったらいいな、誰かの困ったを一つ一つ実現・解消してきた取り組みを以下に示す。

1 すべての人にひらかれた「地域食堂」..「ぶんじ食堂」

月に2度、ぶんじ寮で開催される取り組み。1食300円程度で食べられる食堂で、お金がなくてもまちの清掃やボランティア活動で得られる地域通貨「地域通貨ぶんじ」でも食べることができる。未来のお客さんにお手紙を添



ぶんじ食堂(地域の農家さんのお手伝いや野菜のおすそ分けも、時には有事の際の防災訓練も…)

まちむら発見①

まちの仲間たちと「まちの寮」をつくる

東京都国分寺市 ぶんじ寮プロジェクト

えて1食贈る仕組み「お手紙ごはん」を利用し、無料で食べることもできる。ごちそうになった人から返事が届く。そこには、お子さんからご家族、学生、高齢者まで多世代が集う。共に食卓を囲むことでまちの仲間になっていく様子が伺える。食材は、国分寺市のお野菜「コクベジ」を利用。農家さんが野菜をおすそ分けしてくださることも毎度のことで、手伝いに行くこともぶんじ食堂の取り組みの一部だ。

2 こどもの居場所・遊び場づくり

「こども主体のフリーマーケット」..こども蚤の市」もともとぶんじ寮から徒歩数十m先には、誰でも利用できる無料の遊び場「国分寺市プレイステーション」があった。35年間子どもたちの遊び場としての機能を果たしていたが、2020年に諸事情で移転。移転場所とは子どもたちの足では通うことができず、遊び場が一つ減った。単に場が減っただけでなく、子と親、ご近所さんで育んできたコミュニケーション、そこから形成されてきたコミュニティ・居場所さえも奪ってしまう可能性があった。遊び場が失われても、培った文化・関係性を地域に引き継いでいくべく年に2度ほど開催している。一つ一つが子どもたちのアイデアあふれる素敵なお店が並ぶ。この日にぶんじ寮で出店した子どもたちや親とぶんじ寮の住民の関係性も育まれている。

3 受け止められる場「ゲストルーム活用事例」

ぶんじ寮は2部屋をゲストルームとして活用してい

る。利用の多くは、ぶんじ寮に興味関心をもった方や遠方の方で国分寺に滞在される方である。

国分寺市には児童養護施設や里親家族を巣立った方々を支えるアフターケア相談所「ゆずりは」が存在する。「どこにも帰る場所がない」「家族やパートナーから暴力を受けている」など一人で対応できない難しい困難をサポートされている場所だ。ゲストルーム活用の中には、生活保護申請・受給を含めた住む場所が確定するまでの間、ゲストルームで過ごし、共に支えるという活用方法もあった。個室だけでなく、住民の持ち寄りによって食事が提供されることもある。他にも、ご近所さんがパートナーの暴力からの一次避難場所として利用されたこともあった。もちろん支える側のリスクもあるが、誰かの「困った」に目を背けず向き合ってきた暮らしの実践の一部だ。

4 安心と冒険、一人ひとりの居場所となる場づくり

21室を住まいとして活用しているぶんじ寮の住民は月2回約2時間、住民ミーティングを行っている。課題感をもって対話することもあれば「やりたい」が共有され、さまざまなイベントに昇華することもある。「まちの共用部になっていく」につながる季節のイベント、多世代交流・文化継承も目的に含んだ「味噌仕込み」や「おもちゃつき」など。花火大会の鑑賞場所として屋上を開放したイベント。なにかを共に「する」ことを通じて、そこに「いる」ことができるようになり安心が確保されていく。また、そこから冒険・チャレンジに発展していく事例もある。ぶんじ寮の住民が「やりたい」を叶え



月2度、2時間の住民ミーティングの様子



ぶりんぶりん物語～あなたのやりたいことを叶える企画
(新しく立ち上げた自治会「ぶりん寮じちかい(通称ぶりんじ)」)



こども主体のフリーマーケット：こども蚤の市

る姿に影響を受けた小学1年生が家の駐車場やぶんじ寮の共用スペースを利用したカフェを不定期に開催するといった取り組みや、クラウドファンディングで資金調達に成功し「喫茶ソラクラゲ」という喫茶店を始めた仲間もいる。

ぶんじ寮プロジェクトの約3年間をまとめると、まちの方々・住民の、困ったも余ったもできないも「もちよる」こと、まずは受け止めること。その「もちよる」から生まれるさまざまな事柄を共に、楽しみ、ときには、困り・苦しみ、味わっていく。その結果、孤独の解消や子どもたちの居場所、地域文化の継承等、社会課題と言われるものの解決の一助になっているのではないかと考える。対象を絞った活動ではなく、目の前の人を大切にしたい暮らしの実践である。これからも、課題や不便を保留に委ねる自治の実践を続けていきたい。(ぶんじ寮プロジェクト ぶんじ寮の住民 佐々木将人)